

身体的活動を基盤とした造形・音楽の融合的表現の意義Ⅱ -幼児期における造形表現活動に内包された身体的諸相から-

深尾秀一^{*1)}，北尾岳夫¹⁾，柚木たまみ¹⁾，
三上佳子¹⁾，竹内晋平²⁾

1) 滋賀短期大学 幼児教育保育学科，2) 奈良教育大学 美術教育講座

Significance of Integrative Expression of Art and Music Based on Physical Activity Ⅱ: Focusing on bodily involvement in art expression activities in early childhood

Hidekazu FUKAO 1), Takeo KITAO 1), Tamami YUNOKI 1),
Yoshiko MIKAMI 1), Shimpei TAKEUCHI 2)

1) Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College,

2) Department of Fine Art Education, Nara University of Education

抄録: 幼児は、身近な様々なものに触れ、触発され、そして持ちうるすべての感覚を使い、主体的に様々な「もの」と実際にかかわりながら遊びを展開している。その日々繰り返される遊びは、生きる力を育てているといえる。そのような遊びの中でも、幼児期における粘土遊びは、触覚的であり、心身の発達を促す活動とされている。しかし、身体性からの視点で造形表現遊びを調査研究したものは少ない。そこで本研究では、主に造形表現における身体的活動の傾向について分析することを目的とし、保育園における粘土遊びを対象として、そこにみられる表現活動に伴う動作についての運動学的な視座に基づいた分析を行った。その結果、粘土遊びの環境構成を配慮することによって、全身を使った動作が出現する傾向があることが明らかになった。

キーワード: 幼児教育, 身体的活動, 表現, 粘土遊び, 運動学的視座

1. はじめに

園庭で全身を使って遊ぶ子どもの様子を見ていると、その身体に強いエネルギーを内包していると感じることが多い。それは、幼児一人一人が何か強い思いを持って活動しているからであろう。その活動は「あそび」という言葉でくくられるものか

もしれないが、子どもの生きる姿そのものであるともいえる。幼児は身近な様々なものに触れ、触発され、そして持ちうるすべての感覚を使い、主体的に様々な「もの」と実際にかかわりながら遊びを展開している。日々繰り返される遊びの中にみられる幼児のまなざしからは、様々なものや現

象との出会いすべてに興味を持ち、そこから得られる情報を吸収し確かめ、生きる力を育てていることが読み取れる。このように確かな成長を育む日常生活や遊びの中で、身体性を基盤とした自発的な活動が、その子らしい表現につながっていくことがある。

例えば、今回研究対象とした園において、粘土遊びの後片付け時に、保育者が木のテラスについての粘土を雑巾で拭いていると、それを見ていたひとりの5歳児が「モップがあるよ」と教えてくれ、一緒にモップで拭くという姿を目にしたことがある。この幼児は、モップを使って木目に沿って拭いたり、拭くスピードをかえたりしていたが、木にうっすら残った水を見ると、自分の体を中心にモップを回して円を描いたり、四角形を幾つも描いたりしていた。当初はモップを使った拭き掃除であったが、いつの間にか木のテラスはキャンバスとなり、この幼児の表現活動の場が変わっていった。保育者が一緒に同じ動きをしたり認めたりしたことで、この幼児はその後体全体を使っていろいろな動きをしながら、モップを使って表現することを楽しんでいった。

このような、園生活での幅広い表現における幼児と保育者との関係性をめぐって、中川(2005)は「粘土遊びの心理学」において下記のように述べている。

「人は積極的に生きようとして強い好奇心と能力を持って生まれてきます。のびようとする命の力が体の中に満ちています。それをのびし、表現するために

必要なことはよく遊ぶことです。夢中で遊んでいるとき、子どもは『自発的』に学んでいます。保育者はそのために援助の手を持っているのです。」¹⁾

保育者養成校では、幼稚園教育要領に沿って養成課程の授業を組み立てている。具体的には、幼稚園教育要領の中に示されている「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」のいわゆる5領域をベースに、その領域ごとに授業が組み立てられている。しかし、幼稚園教育要領解説の中では次のようにも示されている。

「各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであること、内容は、幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない。」²⁾

当然、幼児の日々の活動は領域ごとに行われているわけではない。各領域が融合したり、お互いに影響を及ぼしあったりしていることが現実であるため、総合的にと述べられているといえる。

したがって、造形表現活動や造形遊びにおいても、遊びの中で様々な領域の要素が融合して行われているものであると考えられる。とりわけ土粘土を使用した造形表現活動には、様々な要素が関わっ

ている。幼児期における粘土遊びは、触覚的な遊びであり心身の発達を促す活動であるとされている。特に粘土という素材の特性から、身体的動作とその表現活動は切り離せないものであるといえる。しかし、粘土を使用した造形表現遊びを対象に、身体性に視点を置いて行われた調査研究は少ない。

このような背景を踏まえ、筆者らは北尾ら(2021)の言う、表現活動は身体的活動を基盤としている³⁾という視座のもと、滋賀短期大学附属すみれ保育園において保育実践活動を行い、粘土遊びの臨床的調査研究を実施した。本論ではその臨床的調査を通して、粘土遊びにみられる身体的諸相について運動学的分析を行うとともに考察を加え、造形表現における身体の役割について検証を進める。

2. 先行研究の動向と本論の立場

土粘土遊びについては多くの文献があるが、中川(2005)は「粘土遊びの心理学」において、粘土遊びと身体とのかかわりについて素材の触覚性に言及するとともに、粘土は子どもにとって自由に扱える材料であると述べている⁴⁾。また前嶋(2009)はその素材性に注目し、「砂場はあるのになぜ粘土場はないのか」という問いから始まり、2007年に高梁中央保育園に粘土場を設置して以降、「粘土場」における粘土と幼児について研究を進めている⁵⁾。「粘土場」は、大量の粘土を用いる手法である。その「粘土場」について、藤原(2015)は「粘土遊びの指導法に関する一考察」の中で、粘

土遊びの教育的意義について、身体的機能や感性を高める、創造性を育む、情緒を安定させる、そして社会性を育むという4点を挙げている⁶⁾。それを踏まえ、川俣ら(2018)は「粘土場」の教材性について、従来の粘土遊びより身体的・共同的な作業が生まれることにより、発展的な教材性を持つと述べている⁷⁾。

身体性と表現にかかわる部分では、前嶋(2019)は、足の指が粘土をつかむということに視点をあて、粘土遊びにおける内触覚性について、そうせざるを得ない行動であると述べている⁸⁾。また、同じく身体性については、南野(2012)は次のように述べている。

「造形表現においても、関わりの基盤となる身体のありように着目する必要があると考える。とりわけ、自ら言語で説明したり、明瞭な結果的産物に至るばかりではない子どもの造形的な表現を捉えようとする場合、その身体性を理解することが肝要となろう。」⁹⁾

また南野(2012)は、「今後の課題として、身体論や身体感覚についての検討を重ねると共に、発達との関係の中で子どもの表現や身体性を明らかにしていく必要がある。」¹⁰⁾と、表現行為と身体との関係性についての課題を示している。

表現行為における身体性に注目すると、北尾ら(2020)が、描画動作を対象として運動学的分析を行い、描画活動における身体

的側面を明らかにする具体的な方法を示している¹¹⁾。本論では、この運動学的な視座からの分析も利用しながら検証を進めることとした。

3. 方法と手続き

3.1 活動及び記録環境

今回の粘土遊びの活動は、滋賀短期大学附属すみれ保育園において下記の通り実施した。なお事前準備として、実践活動前日の午後に活動場所の設置、及び録画用カメラの設置と動作確認を行った。

実施日

令和3年11月30日

場 所

附属すみれ保育園ホール

対 象

年中クラスの幼児 26名

[対象児はすべて、すでに土粘土に触れた経験を持っている。]

実施時間

1回目実践：9:30から約30分間 13名

2回目実践：10:30から約30分間 13名

準備物

信楽陶芸用粘土 2種類 約120kg

合 板 910mm×1820mm×4mm 6枚

その他 養生シート、清掃用スポンジ等

人員配置

実践担当者 1名

録画要員（研究共同者 3名）

クラス担任 1名

記録用ビデオ機器配置及び活動環境（図

1・2）

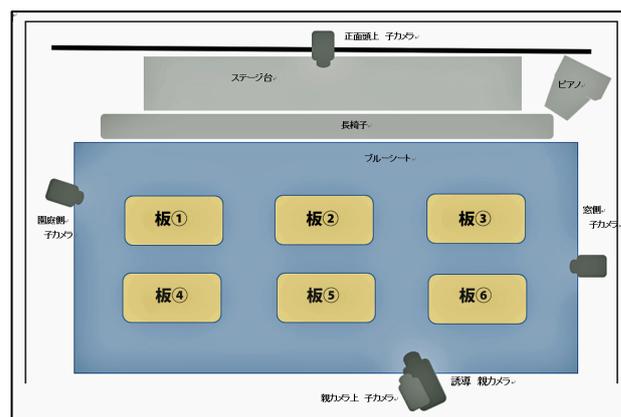


図1 活動場所の配置および機材等配置



図2 活動場所の状況 園庭側子カメラから

録画機材

親カメラ 1台 (Sony HDR-CX680)

子カメラ 4台 (Sony HDR-ZS300)

他ビデオカメラ 1台 (Sony HDR-CX430)

iPad 1台

3.2 記録方法

4方向5台のビデオカメラで撮影を行った。据え置きビデオカメラは、ホール正面の斜め上方に俯瞰映像を取るためのカメラ1台、活動場所左右から1台ずつのビデオカメラ3台で撮影を行った。

また、個々の幼児の活動を記録するために、手持ちで移動可能な親ビデオカメラを

用いて幼児の動きを中心にクローズアップ撮影を行うとともに、同時に親カメラの上部に固定した子カメラで、親カメラ位置からの遠景による撮影を行った。

この5台のビデオカメラは、マルチコントロール・システムを利用して時間的に同期させた同時撮影を行った。その他、幼児の個々の活動を撮影するサブカメラとして、ビデオカメラ1台とiPadを1台使用した。

3.3 運動学的な視座からの分析

マルチコントロール撮影技術を利用して5台のビデオカメラに時間的に同期させて記録された幼児の活動の撮影動画データをもとに、幼児の諸相を読み取り運動学的視点から分類することとあわせ、2次元動作解析ソフト「Kinovea0.8.15」を用いて幼児の動作の運動学的な視座に基づいた分析を行った。

3.4 倫理的配慮

本研究は映像データを用いて分析を行うために、幼児の活動をビデオカメラで撮影し録画している。分析研究を行うための実践を踏まえて、事前に幼児の保護者及び園に書面で研究概要を説明し、書面による同意を取得している。また、本研究の開始にあたり、滋賀短期大学研究倫理委員会による研究倫理審査を受審し、研究の実施及び報告に関して承認を得ている。

4. 活動の様子

実践当日は、クラスを半数の13名ごとの

グループに分け、2回に分けて実践活動を行った。園のホールに用意した6枚の合板上を活動場所とし、3名から4名程度になるように幼児を振り分けた。

活動の初めに、粘土の塊（2～4kg程度）を各自持ち上げて板の上に落としてみようという声掛け(a)と、次に落とした粘土を踏んでみようという声掛け(b)を行った。その後は、各々の自由あそびの時間とした。約30分後に数人ずつ手や足を洗いうように促して活動を終了した。

ビデオカメラによる記録から幼児の活動を振り返ると、様々な身体動作が見て取れた。

活動冒頭の声掛け(a)と(b)は、幼児が研究者の行為を模倣する行為をひき出し、今回の粘土遊びで全身を使う動機づけとなっている。



図3 実践者の指示で粘土を高く持ち上げている

(a)の声掛けの後、幼児は粘土が床板に落ちた時にベタンッと大きな音が出ることに関心を示し、持ち上げた粘土を落とすという動作を繰り返す姿が見られた（図3）。繰り返しの中で、次の様なダイナミックな動作の発展とイメージの想起がみられた。

・粘土の塊を両手で持ち上げ、または頭上

まで差し上げ、手を離して合板の上に落とす。

- ・粘土の塊を両手で持ち上げ、上肢に力を込めて合板めがけて投げつける。
- ・粘土の塊を両手で頭上まで差し上げ、全身に力を込めて「フンッ」と声を発して合板めがけて投げつける。
- ・粘土が落ちた瞬間の音を聞いて、「おもち(餅)～」と声高らかに言葉を発する。

(b)の声掛けの後、下肢を使った次の様な動作が表出され発展した(図4)。

- ・片足で粘土を踏みつける。
- ・「エイッエイッエイッエイッ」や「ウンッウンッ」といったかけ声を発しながら、粘土を片足で踏みつける。
- ・両足で粘土の上に乗って粘土を押し伸ばす。
- ・両足で粘土の上に乗ってジャンプする。
- ・足裏でペタペタと粘土を叩く。
- ・背中で粘土を押し伸ばす。
- ・お尻で粘土を押し伸ばす。
- ・粘土の上で足踏みをする。
- ・粘土の上で足踏みをしながら歌(「歩こう歩こう」¹²⁾…『さんぽ』)を歌う。



図4 実践者の指示の後、粘土に乗っている様子

粘土遊びにおける粘土は、造形素材であり感触を楽しむものである。しかし今回の活動では、幼児が粘土という素材に向き合うことにより様々な身体運動的行動が引き出されるだけではなく、粘土を扱う際に声を発したり、その発声と身体運動を同調させたり、さらには歌唱行為が誘発される姿もみられた。その姿から、川俣らによる粘土遊びの教材性という視点における、さらなる可能性をみる事ができた。

5. 活動中にみられた幼児の動作

表1は、各回の活動場所において、実践担当者が声掛け(a)を行ってから活動の終了を告げるまでの間に観察された幼児の動作を抽出し、抽出された動作を手の動作、足の動作、粘土上の動作に整理分類して示したものである。

動作の抽出にあたっては、時間的に同期

表1 活動中にみられた動作

動作	発現箇所	1回目実践				2回目実践							
		②	③	④	⑥	①	②	③	④	⑤			
手の動作	両手で抱きかかえる	3	○										
	両手で押して転がす	2	○										
	両手で持ち上げて床に投げつける	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	両手で持ち上げて落とす	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	両手で持ち上げて頭上に差し上げる	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	★手の指で突く	2			○	○							
	★手の指でちぎり取る	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	★手のひらで握って棒状に伸ばす	1				○							
	★手のひらで押し伸ばす	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	★手のひらで丸める	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	★手のひらで棒状に伸ばす	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	手のひらで叩く	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	手刀で叩く	1								○			
	拳で叩く	3	○										○
	拳で突く	2								○			○
	上から投げる	3	○							○			
	下から投げる	1	○										
足の動作	足の指で突く	1											○
	足の指でひっかく	2		○	○								
	足裏で踏みつける	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	足裏で叩く	2	○	○	○								
	足裏で棒状に伸ばす	1		○									
足裏で丸める	1		○										
粘土上の動作	お尻で押し伸ばす	2	○										○
	上に乗る	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	上に座る	1	○										
	上に寝転がる	1											○
	上で足踏みをする	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
上で飛び跳ねる	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
			19	16	17	14	10	10	15	14	11		

されている親カメラ1台と子カメラ4台のうち、対象となる活動場所の様子が最も確認しやすい映像を選びながら、それぞれの場所での活動開始から終了までの間にみられた、粘土に対して直接的に働きかけている動作に着目した。

今回の実践活動は2回に分けて行われており、それぞれの実践において図1に示したとおり、①～⑥の6カ所の活動場所を設定した。しかし、幼児の人数の関係上、各回の実践ですべての活動場所が使用されてはならず、1回目実践では①と⑤を除いた4カ所、2回目実践では⑥を除いた5カ所が活動場所となった。よって、1回目実践で②～④と⑥の4カ所、2回目実践で①～⑤の5カ所の活動場所が観察対象となっている。

最初に、分類ごとの動作について触れることとする。

手の動作のうち、★を付したものは粘土を使って何かを作るときの手先の動作と捉えることができるが、それ以外の動作では、大きな塊を抱きかかえる、押して転がす、頭上に差し上げる、手刀や拳で叩くなど、手による動作ではあるが全身を使った力感を伴う動作が確認できた。また、繰り返し粘土を床に投げつけるなど、粘土の可塑性を楽しんでいるとも捉えられる動作も確認できた。

足の動作においては、すべての活動場所において足裏で踏みつける動作が確認できた。力を込めてかけ声を発しながら何度も踏みつけたり、体重を乗せてじわっと踏みつけて粘土に残された足形を確認した

りするなど、手の動作と同様に力感を伴うものや粘土の可塑性を楽しんでいると思われる動作であった。

粘土上の動作では、足踏みをする動作が多くの活動場所を確認できた。なかには、足踏みをしながら歌「さんぽ」(『となりのトトロ』オープニングテーマ)を歌うなど、日頃の他の活動イメージと結びついていると思える場面も観察された。

観察された動作は、半数以上が手の動作であるが、手だけでなく足を使った動作も出現し、また粘土の上に様々な方法で乗り、粘土の上で飛び跳ねるなどの動作がみられた。これは、幼児の前にある粘土の質感や量、また塊としての大きさ、さらには合板を敷いてその上で活動するという今回の環境構成が影響していると考えられる。

先述したように、特に足の動作や粘土上の動作については、今回の環境構成が影響を及ぼしダイナミックな動作が誘発されたと考えるが、その事例を図5に示す。

図5は2次元動作解析ソフト「Kinovea0.8.15」を用いて作成したもの



図5 粘土の塊を床に投げつける動作

であるが、画像上で指定したポイントがどのように動いたか、その軌跡を赤色の線で可視化したものである。図上の白と黒で構成された円形のあるところが各ポイントの軌跡の終点であり、その反対側が動きの始点となる。

腕の振りの軌跡である軌跡Ⅰからは、軌跡が描くカーブの頂上からやや下がった位置に始点があることから、幼児が粘土の塊を頭上に差し上げるだけではなく、肘関節を屈曲させた振りかぶるような状態から大きく腕を前方に振り出していることが分かる。腰部の軌跡である軌跡Ⅱは、股関節が伸展して直立している状態から股関節を屈曲させて前傾姿勢に移行したことを示している。軌跡Ⅲは膝部の軌跡であるが、分析処理の関係上、ポイントを膝の裏あたりに設定している。この膝部の後方への移動は、股関節の屈曲に引きずられる形で膝部が後方へ移動した様子が分かる。軌跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは連動して発生しており、映像の観察からも全身を使った非常に効率の良い投げつけ動作が行われていたことを確認している。

幼児のこの動作は、実践担当者の声掛け(a)の直後に発現したものではない。この幼児は当初、粘土をちぎり取って小さな塊を棒状にしたり丸めたりしていた。しかし、大きな粘土の塊に手に取ると、都合16回にわたり粘土を差し上げて落としたり、投げつけたりという動作を行っている。図5は9回目の投げつけ動作であるが、回を重ねるごとに動作がダイナミックになるとともに、より大きな塊を持ち上げようと試み

る姿もあり、粘土の重さとも格闘しながら持ち上げ、投げつける動作を繰り返している様子がみられた。一連のダイナミックな動作が発現した後、活動の後半部分は再び小さな塊を丸めたりしながら、自分が作った大きな塊の上に置いて何かを作っている様子であった。こういった様子から、この幼児は自身の身体が持つエネルギーと全身を使って、粘土が持つ質感や重さ、可塑性といった素材そのものと向き合っていることがみてとれる。

次にそれぞれの活動場所で観察された動作と、実践担当者及びクラス担任の関わりについて触れることとする。

動作の数に着目すると、2回目実践の活動場所①と②が10、⑤が11と、他の活動場所と比較すると少ないことが分かる。この3カ所に共通していることとして、他の活動場所と比較すると、活動の早い段階から比較的長い時間、実践担当者もしくはクラス担任が、表1にある手の動作の★印を付した動作である粘土を丸めたり、棒状に伸ばしたりといった動作をしながら幼児と関わっていたことが挙げられる。

2回目実践の活動場所①では、当初は粘土を踏みつけたりするなどの動作が見られたが、クラス担任が関わって以降は、3人いる幼児の一人を除き、座ってクラス担任の動作と同様の動作を行うことが中心になっていた。

2回目実践の活動場所②については、2人がその場所で活動しており、その内の一人は、終始、積極的に粘土と関わる姿がなかった。クラス担任は活動当初からその幼

児と丁寧に関わっており、その関わりのなかで活動場所①と同様の動作を行う姿があった。なお、その幼児に積極的に関わる理由についてのクラス担任への聴き取りは、今回の調査研究の主旨から行っていない。このこととあわせて、一方の幼児が活動の比較的早い段階で粘土の大きな塊を組み合わせて歩道橋のようなものをつくり、「できた、見て！」と周囲に対して繰り返し発言したことで、もう一方の幼児が粘土に触れにくくなってしまったという要因があるかもしれない。

2回目実践の活動場所⑤については、活動の最初の段階で実践担当者が関わっていた場所である。実践担当者は座って、活動場所①や②と同様の動作を行っていた。実践担当者がその場にいる間は、幼児たちも座って実践担当者の動作を真似ていた。活動の途中で実践担当者はその場所を離れるが、それ以降、幼児たちは周囲の子どもたちの様子を観察しながら、立ち上がって粘土を踏みつけたり、粘土の上に乗ったりするなどの動作が確認できたことは興味深い。

これらのことより、今回の活動において、実践担当者やクラス担任の行動が幼児の活動に大きな影響を与えていたということがうかがえる。

6. おわりに

今回の分析から、粘土遊びによって多様な身体的な動作や行為が生まれ、その子らしい表現が生まれる過程につながるものがうかがえた。また、粘土遊びにおいては、

保育者は自身の行動が子どもの粘土への関わり方に大きく影響する可能性があることを意識していく必要がある。粘土遊びという活動をイメージするとき、多くの保育者どのような活動をイメージするであろうか。大人の感覚をもとに推察すると、粘土を使って何かを作ることにとられてしまっていないだろうか。今回の実践から、環境構成について配慮を行うことで、粘土遊びには全身を使った身体表現が含まれるということが明らかになった。保育者は粘土という保育材に関わる子どもの活動に、全身を使った身体的活動も含まれることを理解し、その活動をも十分に保障するなかで、保育者として粘土という素材にどのような思いや願いを込めて関わるかを明確にしていくことが求められるのではないだろうか。粘土という素材に対してこのように捉え方ができることで、粘土の保育材としての価値もより一層深まりを見せると考えられるのではないだろうか。

黒川（1989）は『保育内容・表現』の中で、次のように述べている。

「それだけに、もう一度、表現が、私たち自身のかかわる日常的な活動であること、私たちが、自分で、いつも何気なく繰り返している行為であることに、目を向け直しておきたい。」¹³⁾

造形表現行為のはじまりは、「もの」との出会いであるといえる。今回使用した素材である土粘土は、幼児にとって他の表現

材料や教材に比べて自然に近い素材といえる。そのことも幼児の探求心を触発して様々な活動・行為が見られたのかもしれない。

本研究調査は、幼児の粘土遊びの実践活動で成果物に注目するのではなく、幼児の行動と動作に注目し、身体的活動と表現行為の関連について考察を行った。身体的な視点を持ちながら活動を見ていくことで、幼児の全身を使った行為としての表現活動が見えてきたといえる。

幼稚園教育要領解説では、以下のように述べ、幼児の行為を表現として捉えるようにと示している。

「はっきりとした表現としては受け止められない幼児の言葉や行為でさえも、教師はそれを表現として受け止め共感することにより、幼児は様々な表現を楽しむことができるようになっていく。」

14)

今回は粘土遊びを分析の対象とし、極めて限定的な範囲で表現活動と身体性の関係を探求したのみであるが、今後、臨床調査を進め多くのデータを収集し考察を行うことで、幼児の様々な表現活動における身体性の捉え方を明らかにしていきたい。

謝辞

本研究で調査に協力してくださった滋賀短期大学附属すみれ保育園の子ども達と保護者、および先生方に深謝する。

付記

本研究は、令和3年度科学研究費 基盤研究(C)(課題番号;21K02509,研究課題:幼児期における感性の育みを促すく身体・造形・音楽>の融合的表現に関する基礎的研究)の助成を受けた研究成果である。

文献

- 1) 中川織江(2005) 粘土遊びの心理学. 風間書房. 68.
- 2) 文部科学省(2018)幼稚園教育要領解説. フレーベル館. 142.
- 3) 北尾岳夫・深尾秀一・柚木たまみ・三上佳子・竹内晋平(2021)身体的活動を基盤とした造形・音楽の融合的表現の意義Ⅱ. 滋賀短期大学研究紀要, 46, 55-66.
- 4) 前掲(1). 21.
- 5) 前嶋英輝(2009)粘土場の遊びと環境. 美術教育, 292, 76.
- 6) 藤原逸樹(2015)粘土遊びの指導法に関する一考察. 安田女子大学紀要, 44, 192.
- 7) 川俣美砂子・阿部鉄太郎・玉瀬友美・三ツ石行宏・山中文・矢田崇洋・大西美玲(2018) 幼児期における「粘土場」遊びの教材性. 高知大学教育実践研究, 32, 117.
- 8) 前嶋英輝(2019)粘土遊びの情報と評価法. 吉備国際大学研究紀要, 29, 67.
- 9) 南野慶子(2012)粘土遊びにおける表現と身体性についての一考察 -粘土を身体につける事例の検討から-. 人間文化創成科学論叢, 15, 242.
- 10) 同上, 248.
- 11) 北尾岳夫・竹内晋平(2020) 乳幼児の造形活

動を対象とした運動学的分析 I —描画動作の数量化に関する方法論を中心に—. 滋賀短期大学研究紀要, 46, 93-100.

12) 中川李枝子作詞, 久石譲作曲「さんぽ」(映画『となりのトトロ』オープニングテーマ), 1988年発表.

13) 黒川建一(1989)保育内容・表現, 建帛社. 4

14) 文部科学省(2018)幼稚園教育要領解説. フレーベル館. 245.